

批判的思考を必要とする課題の達成と 批判的思考態度の諸要素との関連

The effect of critical thinking dispositions on task achievement requiring critical thinking skills among Japanese college students

都築 幸恵[†], 新垣 紀子[†]
Yukie Tsuzuki, Noriko Shingaki

[†]成城大学
Seijo University

tsuzuki@seijo.ac.jp

Abstract

Educating critical thinking is among the most important goals in higher education in Japan. Ennis (1987) defined critical thinking as "reasonable and reflective thinking that is focused on deciding what to believe or do." The ability to evaluate evidence and arguments independently of one's prior beliefs and opinions is a skill that has been strongly emphasized. Successful use of critical thinking skills requires an attitude or willingness to think critically. In this study, relationships between dispositional components and critical thinking skills, focusing on applying critical thinking when reading news, were examined among Japanese college students. Participants were presented with a newspaper article portraying an apparently tragic incident which would lead their readers to hold strong opinions. Then they were requested to comment on the incident from an "alternative" perspective. Participants were also administered with the Japanese inventory for critical thinking dispositions. Participants were divided into two groups, one group being successful in taking an alternative perspective regardless of one's prior opinions and the other being unsuccessful in doing so. The former group was significantly higher on scores on the "inquisitiveness" factor of the critical thinking dispositions. Implications for critical thinking education were discussed.

Keywords — critical thinking, critical thinking dispositions, college education, media literacy

1. はじめに

我が国において、大学生に対する批判的思考の教育や支援は、大学の重要な役割の一つとなってきた。道田(2001)も指摘するように、大学教育においては専門的な知識の習得のみならず、主体的に問題を見出し創造的に解決する能力や、氾濫する情報のなかで主体的に情報を取捨選択し、

批判的に判断していく力を養成することが必要である。

大学における批判的思考教育の重要性は、諸外国においても同様に認識されている。例えば、アメリカの大学教育において、批判的思考に関する教育は、最も重要な教育目標の一つとされている。Halpern (1998) は、インターネット等の普及による情報量の爆発的な増加に伴い、情報の取捨選択や評価にかかわる批判的思考の教育は、21世紀に生きる市民にとって必須の教育であると指摘している。

今日、氾濫する膨大な情報の渦に自らを失うことなしに情報を取捨選択し評価することを身につけるには、批判的思考を中核としたメディア・リテラシー教育が必要であろう。メディアが提示する情報を鵜呑みにするのではなく、批判的な思考を適用して情報の信頼性を評価できる力をつけることは、大学教育にとっても重要な意味をもつ。

それでは、批判的な思考を適用して、メディアが提示する情報に接するということは、具体的にはどのような認知、行動のあり方なのであろうか。例えば、新聞やテレビが提示するニュースに接する場合を考えると、メディアが提示する情報が、ある価値観を暗黙の前提として、操作され構築されたものであることを意識していること、また、同一の事象であっても、異なる価値観をもつジャーナリストによっては、全く異なる物語としてその現実を提示する可能性があることを認識してい

ることなどは、メディアが提示する情報と賢く接する市民であるためには必要な認知のあり方であろう。また、ある事柄についての判断を下すのに、自分が最初に接触した単一の情報源のみに依存することなく、より多角的な見地からの情報を求め、複数の情報や観点を比較、検討しつつ慎重に結論を導くことも重要であろう。

批判的思考とは、物事を客観的に偏りなくとらえ、多角的に検討し、適切な規準に基づいて判断する、合理的で論理的な思考(Ennis,1987)と定義されている。批判的思考に関する先行研究では、自分自身の既存の信念や意見とは独立して、議論や証拠に対する評価を行うことが批判的思考の中核であるとされる。しかし、結論の妥当性を判断する際に、その論理の妥当性ではなく、自分の意見や信念と一致しているかによって判断してしまう信念バイアス(e.g., Stanovich & West, 1997)や、自分の意見を支持する証拠ばかりを集め、反する証拠に対しては、その価値を軽減して評価する確認バイアス(e.g., Kardash & Scholoes, 1996)などが示されており、これらのバイアスをどのように回避するかが、批判的思考を行う際に重要な課題となる。

批判的思考は、態度など情意的側面と能力の認知的側面とによって構成される(Ennis, 1987)。批判的思考は、認知的なスキルを持っているだけでは十分に発揮されず、批判的思考態度を併せ持っていることが必要である。

実証研究においても、批判的思考における態度の重要性が示されている。Kardash and Scholes (1996) は、AIDS と HIV との関係性について、対立する2つの主張についての文章と根拠を提示した。研究参加者は、双方の主張を読んだ後に、AIDS と HIV との関係性についての結論を生成することを求められ、その結論の明確さの度合によって、批判的思考の高低が評価された。AIDS と HIV との関係性について二つの相反する情報を提示された場合、認知欲求が高いほど、情報が信念とは反対であっても、より適切な結論を導く傾向が見られ

た。認知欲求とは、考えるための労力や時間を惜しまず、むしろ認知活動を楽しむという内発的傾向であり、批判的思考態度の一側面である。

また、平山・楠見(2004)は、環境ホルモンが人体に悪影響を及ぼすか否かという、対立する議論を含むテキストからの結論導出プロセスに、批判的思考態度がどのように関与しているのかについて、「論理的思考過程の自覚」、「探究心」、「客観性」、「証拠の重視」の4つの下位尺度から構成された批判的思考態度尺度を用いて検討を行った。その結果、多様な情報を幅広く希求する「探究心」という批判的思考態度が、信念バイアスを回避して適切な結論を導出する際に、重要な役割を果たすことが示唆された。つまり、信念とは矛盾する情報の適切な評価について、探究心の要素が影響を及ぼしていた。

このように、科学的な内容を扱った議論(AIDS と HIV の関連、環境ホルモンの影響など)についての両研究では、それぞれ、認知欲求と探究心という批判的思考態度の要素が、信念バイアスの回避に対して大きく影響していることが示された。

都築・新垣(2012)は、参加者である大学生にとって身近な社会問題である「ゆとり教育」に関する新聞記事などの資料を題材として、批判的な読みと批判的思考態度との関連を研究した。

「批判的な読み」とは、批判的思考を働かせながら文章を読むことであり、書き手の論理や結論の妥当性を吟味しつつ、自ら問題を発見し理解を深めるような読みである。批判的読みの重要な一側面として、大河内(2003, p.307)は、「複数の情報の統合」を挙げている。同じトピックに関して複数の情報を読み、比較し、それらの不一致を発見し、それぞれの情報を評価するような活動は、批判的思考を働かせながらの読みである。

都築・新垣(2012)では、提示された「ゆとり教育」に関する複数の資料を比較、検討し、不整合を見出すなど、批判的な思考を適用した読みができていないか否かに着目して、批判的な読みと批判的思考態度の関連について検討した。その結果、

批判的思考態度尺度の総合得点と、下位尺度の一つである「証拠の重視」得点において、批判的な読みを行った群は、そうでない群に比べて、有意に高かった。

このように、Kardash and Scholes (1996)、平山・楠見(2004)、都築・新垣 (2012) においては、異なる批判的思考課題が提示されており、それぞれの達成と関連する批判的思考態度の要素は異なっていた。

本研究においては、都築・新垣 (2012) と同様に新聞記事を材料とするが、批判的思考課題の性質・内容によって、特に重要な役割を果たす批判的思考態度要素が異なるのではないかとの問題関心にに基づき、新たな批判的思考課題を課し、その達成と関連する批判的思考態度の要素を検討した。

本研究では、新聞記事を用い、その記事に書かれている事実について、新聞記事に内在する立場やそれによって喚起される信念や感情とは独立して、別の立場や価値観からの解釈を提示するなど、物事を多角的に検討することができるかに着目し、その課題達成と批判的思考態度の関連について調べることを目的とした。

2. 方法

参加者：東京の私立大学に在籍し、心理学・社会学などを専攻する 72 名の男女大学生であった。

材料：以下①~③によって構成される質問紙を作成し、それを用いた。

①新聞記事：

材料とした記事は、「病院、患者捨てる」という見出しとともに、アメリカ・ロサンゼルス市の病院が日ごろから貧しい患者を遺棄していることを報じている 2006 年の新聞記事である。アメリカ社会の「現実」を、貧困層の窮状という点から描きだしており、弱者に対するシンパシーが含意されている記事であった。

②異なった視点からの文章作成問題

材料となった記事は、そもそも人の命を救う組織たる病院が貧しい患者を遺棄していることを問

題とし、病院への義憤、患者に対する同情を喚起させるような内容であった。実際に、この記事内容に関する感想を集計すると大多数の参加者が病院に対して義憤を感じていた。そのうえで、参加者に、アメリカにおけるリベラルと保守の対立軸についての説明文を提示し、この記事で言及されている事実に対する、対立する立場からの解釈を考えて記述する問題を課した。この課題により、記事の前提とする立場や記事内容に関する自分の意見や感情とは独立して、対立する立場からの解釈を提示することができるかを調査した。

メディア・リテラシー教育においては、メディア・テキストが含み持っている考え方や価値システムの意識化を行う必要があるとされている(カナダ・オンタリオ州教育省, 1992, p. 10)。また、イギリスのメディア教育の教材パッケージである”Teaching TV News”には、ニュースとは現実そのものではなく、イデオロギー的なメッセージとともに制作され提示されるものとしている(p.6)。ニュース報道とは、現実を客観的に反映しているものではなく、報道者の意図や価値観によってデフォルメされた結果の産物である。つまり、批判的思考をもってメディアの報道記事に接するということは、描かれている事実が唯一無二の現実であると考えず、他の価値観をもったジャーナリストであれば、まるで異なった描写をすることもあり得ることを知ることである。

この記事は、アメリカの「保守—リベラル」対立軸における、リベラルな価値観を前提とする記事であると考えられた。反対の価値観をもって同じ事象を解釈するという認知的な課題は、記事によって喚起された感情(病院への批判、遺棄される患者への同情)から独立して、別の視点からの解釈を論理的に提示できるかについて調べるものであり、批判的思考を中核としたメディアリテラシーに関する課題とも言える。

③批判的思考態度尺度

平山・楠見(2004)の尺度を使用した。「論理的思考への自覚」(13 項目)、「探究心」(10 項目)、

「客観性」(7項目)、「証拠の重視」(3項目)の4因子、計33項目で構成された。全項目をランダムに並べ替えて質問紙を作成し、それぞれの項目について「1. あてはまらない」から「5. あてはまる」の5段階で評定させた。

3. 結果

参加者72名のうち、記事とは異なった立場から解釈が出来た者は56名(77.78%)であった。16名(22.22%)は、アメリカでの貧困層の窮状について記事と同様に同情的かつ共感的に言及しており、対立する立場からの解釈を行わなかった。この二つのグループを、批判的思考態度尺度において比較したものが表1である。対立する立場からの解釈ができたグループは、そうでなかったグループよりも「探究心」において有意に高い得点を示した($t=-2.47, p<.05$)。

表1 対立する視点から解釈する課題の達成・失敗と批判的思考態度得点(平均・標準偏差)

	課題達成群	失敗群
批判的思考 態度全般	3.66(.44)	3.04(.58)
論理的思考 過程の自覚	3.11(.63)	3.04(.58)
探究心	4.19*(.54)	3.79*(.62)
客観性	3.82(.64)	3.77(.61)
証拠の重視	3.51(.78)	3.56(.64)

* $p<.05$

4. 考察

本研究の課題は、新聞記事に内在する立場やそれによって喚起される信念や感情とは異なる立場から物事を捉えるという性質をもったが、この課題の達成には、「探究心」という批判的思考態度の要素が重要な役割を果たしていることが示された。

この結果は、平山・楠見(2004)の研究結果と一致している。平山・楠見の研究でも、信念と矛盾する情報を適切に評価するか否かは、「探究心」の

要素が影響を及ぼしていた。既存の立場や信念にとらわれず、異なった視点から物事をとらえ、別の解釈を考えることを目的とした本課題においても、批判的思考態度の「探究心」の要素が重要な役割を果たしていた。

また、Kardash and Scholes (1996) は、AIDS と HIV との関係性について二つの相反する情報を提示された場合、認知欲求が高いほど、情報が信念とは反対であっても、より適切な結論を導く傾向が見られた。認知欲求とは、考えることを楽しむという内発的傾向であることから批判的思考態度尺度(平山・楠見, 2004)における「探究心」に近いと考えられ、本研究の結果と符合している。

一方、都築・新垣(2012)における、複数の資料を比較、検討し、不整合を見出すなどの批判的な思考を適用した読みを行う課題の達成には、批判的思考態度の「証拠重視」の要素が重要な役割を果たしていた。課題の性質により批判的思考態度の異なった側面が特有の役割を果たしていることがうかがえる。都築・新垣においても、本研究においても、時事的なニュースを扱った新聞記事を材料としているが、新聞記事の内容を異なった観点から検討するという課題と、新聞記事の内容を他の情報源と比較して統合的に理解するという課題とでは、関連の深い批判的思考態度の要素は異なることが示された。

以上のように、批判的思考を適用する課題の性質と内容に応じて、特に関連の深い批判的思考態度の側面は異なっていた。どのような批判的思考課題にどの側面の態度がより強く関連しているのかを探究していくことは、今後、批判的思考を育てる教育を発展させていくうえでも重要であろう。また、本研究では、新聞記事を主たる材料として用いているが、情報の氾濫する現代社会において、批判的思考を適用してメディアが提供する情報に接し、メディア・リテラシーを向上させることは大学教育にとっても非常に重要な課題であろう。メディア・リテラシー教育の観点からも、批判的思考に関する研究の発展が望まれる。

参考文献

- [1]Ennis, R. H. (1987). A taxonomy of critical thinking dispositions and abilities. In J. B. Baron and R. J. Sternberg (Eds.) *Teaching thinking skills: Theory and practice*. W. H. Freeman and company, pp. 9-25.
- [2]Halpern,D. F. (1998). Teaching critical skills for transfer across domains. *American Psychologist*, Vol. 53, pp.449-455.
- [3]平山るみ・楠見孝(2004). 批判的思考態度が結論導出プロセスに及ぼす影響—証拠評価と結論生成課題を用いての検討—, 『教育心理学研究』, Vol. 52, pp.186-198.
- [4]カナダ・オンタリオ州教育省編(1992). 『メディア・リテラシー』. リベルタ出版.
- [5]Kardash, C. M.,& Scholes, R. J.(1996). Effects of preexisting beliefs, epistemological beliefs, and need for cognition on interpretation of controversial issues. *Journal of Educational Psychology*, Vol. 88, pp.260-271.
- [6]Lewis, E. (2003). *Teaching TV news*. BFI education.
- [7]道田泰司(2001). 日常的題材に対する大学生の批判的思考—態度と能力の学年差と専攻差. 『教育心理学研究』, Vol. 49, pp.41-49.
- [8]大河内祐子(2003). 批判的読みにおける文章の構造的側面の役割, 『東京大学大学院教育学研究科紀要』, Vol. 43, pp. 305-313.
- [9]Stanovich, K. E.,& West, R. F. (1997). Reasoning independently of prior belief and individual differences in actively open-minded thinking. *Journal of Educational Psychology*, Vol.89, pp.342-357.
- [10]都築幸恵・新垣紀子(2012). 賛否の分かれる身近な社会問題に対する大学生の思考プロセスの分析. 『認知科学』, Vol .19, pp. 39-55.